世界婦人

●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

囚人

幸德秋水

（一）

若葉は青葉となりぬ、同志石川、山口の二兄獄に下りてより茲に一個月

明治四十年五月二十五日は、舊社會黨大會の演說及び決議に關する被告事件控訴公判の開かる可き日なり、午前九時、予は此公判を聽く可く、急ぎて裁判所の門を入れり、只見れば正面の石段の上に大杉兄は既に保子夫人と横田兵馬兄を伴ひて立てり、予を迎へて微笑していふ『僕も愈々明日行く』と、何處へと問ふこと勿れ彼れも亦監獄に行かんとするなり、罪にクロポトキン翁の『青年に訴ふ』文を譯せる『罪』の爲めに！

樓上に上りて、控訴院三號法廷の前に出れば、早や數十名の同志は廊下に群集して在り、社會黨の禁止、平民新聞の廢刊以來面會の機會稀なりし懷しの同志は三々五々互に手を取りて、娓々として談じ嬉々として笑ふ、後れ馳に駈けし堺兄も笑つて曰く『僕も今日、倶樂部に來るやうな積で來た、一同に會へるから』

（二）

一時間過ぎ二時間過ぎたり、公判は開廷せずして遂に延期となれり、衆皆な失望して去らんとする時『來た〱』の囁きは一隅に起れり、見よ！此方を指して一個の赭の囚衣着たる男子、顏は編笠に掩はれて見えず、兩手は手錠に束ねられて動かざれど、足並確かにサツ〱と歩み來る、看守は縛めの繩を取りて後に從ふ、『アレカ』『石川君か』『さうだ〱』と口々に罵ると同時に、群集は前後左右よりバラ〱と立かゝりて、物云ひかけ笠の下を差覗く、看守は慌てゝ彼等を押分け突除けて、進む囚人は一々目禮し、點頭して行く

囚人は法廷に入れり、予が直ちに彼れを尾して入らんとする時囚人は直ちに出來れり、予を見て低聲に『延期だ』といふ、予は彼れの軀幹の痩たるを見、彼の袷一枚の寒げなるを見、彼の赤足に草履の痛々しきを見て、愴然として聲を出す能はざる間に、彼は續けて『身體は善いか』と問ふ、予は『ア、善いよ、君こそ大事に仕玉へ』といふ中、看守は殘酷にも彼の肩に手を掛けて、突遣りたり、群集は又も前後左右を取圍めり、看守は匆皇として引立て行けり、三四の同志は猶ほ離るゝに忍びずして、遂に建物の最下層なる、檻倉の入口迄追ひ行き送りに『石川君萬歲』を唱へて引上げぬ

嗚呼予が西川兄と共に、編笠を被り囚衣を着け、手錠をかけられて、控訴院の法廷に曳出され、洋服着たる石川兄が新聞記者席に在るを見て一笑せしは實に一昨年の三月なりき、圖らざりき僅かに二年の後にして、當時と同じ場所に於て、當時の予と同じ姿せし吾兄を見るの運命に會せんとは

（三）

嗚呼法庭、看守、囚衣、手錠、捕繩、編笠よ、常人に在りて最も忌む可く嫌しむべき是等の物件は、今や我等同志の運命とはなれり

昨日山口兄の書簡に接して、彼れが獄中に眼を病みて、讀書の自由ならざるを知り、今は石川兄の痩し姿を見て、其肩上に他の多くの被告事件を擔へるを思ふ、永岡、山本等の諸君は縛に就てより既に百日を過ぐれども歸期知る可らず、西川君僅に保釋を以て歸り、未だ二旬ならざるに、大杉兄直ちに代りて行かんとす、吾人同志も亦牢獄を好む者に非ず、法律と云ひ、裁判と云ふ、其尤も惡む所也、左れど古來の改革運動、自由と正義との爲めにする大運動にして、孰れか能く免るゝことを得べき、否な、唯た數ヶ月の禁錮のみならんや曾て我等先輩の戰ふ所、磔刑ありき、車裂ありき、炮烙ありき、絞頸ありき、凍死ありき、餓死ありき、哀しい哉、弱き我等も亦我改革の旗を撤せざる以上は、亦此運命を甘受するの覺悟なかる可らず、婦人解放運動の姉妹諸君も、亦其主義を抛たざる限りは、之を甘受するの準備なかる可らず

石川君の書信

入獄して最初の書面なれば何れに差出さんかと思ひ迷ひしが、遂に姉の許に送るが便利と決しました、世界婦人に御掲載の上同志知友に御頒ちを乞ふ、若し社會新聞の方に間に合はゞ同方へ御譲し下さい△同志知友諸君、僕入獄以來心身共に至極健全靜かに讀書に耽つて居升、御安心を乞ふ△大阪にて「大阪平民新聞」東京にて「社會新聞」が同時に發刊せらるゝを聞きて歡喜に堪えず、如何しても春が來れば花が咲き、秋が來れば五穀が實る、至る處に咲き、至る處に實る、何者の愚ぞ此の天地大能の力に抗せんとするや△此際西川兄無事出獄し片山氏又た此地に在りて活動せらるゝは大に同志の意を強ふする所でせふ△幸德兄の健康餘り宜しからずと聞く偏に攝生を祈る。殊に奥さんの嚴格なる看護を祈る△堺兄社會問題辭典の編纂に着手せし由新る地味なる事業は人の多く企てざる所、自から此事に當られし兄の勞を謝す△拙稿「日本社會主義史」も出版になる由病中の幸德兄が自ら周旋の勞を執られし事感謝に堪えず、其材料、其綱領、皆兄の指導に由りて成りしもの、此書出づるに當て兄の勞却て多く僕の努め少かりしを思ふ△新紀元同人諸君に申す、黎明研究會及び讀書會は是非續行して下さい、僕も毎日聖書を讀んで居ます、此の弱き小さき身なら希くは全き犠牲として御前に献ぐるを得しめよとは僕今日の祈願です△入獄以來、一休和尚傳、クロポトキン先生自傳、老子カールマルロのフエテフリズムヘツクス論文等を讀み、今レーの書中で社會主義の近狀を讀んで居ます△クロ翁の自傳は殊に愛讀しました、或は涙を流し、或は血を沸し、或は襟を正し、一週日の間殆んど之に心醉しました、そして多大の教訓と智慧と激勵と慰藉とを得ました△久ぶりにて老子を讀み多少發明したこともある、彼を以て單に虛無、恬淡、靜寂の道を唱ふるものとするは甚しく當らず、彼は虛無家に酷似せる革命家ではあるまいか△毎日多數の來客に接してイヤな獄中生活を慰めます、深く諸君の厚情を謝す△廿五日には二事件の公判が一度にある、面倒故一日に濟ませたい△秀湖合格の由僕等の入獄よりも辛からう[illegible]村君の徴兵は如何△谷中村、田中翁の近狀如何△逸見夫人と柴田兄僕方付の勞を謝す△言ひたき事謝すべき事多けれど餘白なし△龍ちやんはドウしました

五月十八日　石川三四郎

福田英子樣

破壞せよ

破壞せよ一切を破壞せよ道德も宗教も國家も社會も破壞せよ繊弱き腕もて有らゆる者を破壞せよ破壞の目的を以て破壞せよ吾等の破壞は建設なり吾等の建設は破壞其ものにあらずして何ものぞ・見よや彼等の迂愚なる虛僞なる建設を、彼等に建設あるが故に吾等に破壞なかるべからず噫！破壞々々一切の破壞！破壞は否定なり拒絕なり殺戮なり客觀界を破壞し得ずんば主觀界の破滅を期せよ

超脫

超脫とや、そは世の口に蒼蠅かりし言の葉なり。然れど超脫は言葉にあらず、觀念にあらず、諦めにあらずして斷行なるよ。噫超脫、超脫は決行なり經驗の生める決斷なり然からざるものは虛僞の類のみ、煩悶の結べる超脫、純主觀に孕める超脫其の超脫はやがて、革命の搖籃ならずや恨み歇して恨みを超脫し、怒り盡して怒りを超脫し、戀し通して戀よ　超脫せよ。木石たらずして超脫せよ

曉鷄

尾崎溪泉

冷しき朝の夢さめず
靜けき空をうち破り
羽風たけしく朝鷄は
森のかなたに音をつたへ
人の安眠をさますなり

ああ勇ましの男兒等が
革命軍の赤旗たてて
愛と自由と平等の
平和の世をば建設かんと
警醒するに似たるかな

空にそびゆる高樓の
高貴に誇れる子供等が
綠酒の夢にさそはれて
舞踏の銀燭かゞやかす
これ同胞の膏血ならずや

聖經は虫ばみ精神はも
權力の宮殿に摺伏りて
人の皮被る獸類が
誇り建てたる大伽藍
滅亡の色は表はれぬ

曉やぶるその聲に
民主自由の生命あり
愛と平和と平等は
清く、崇高く、美はしく
曉の曙光にかゞやけり

壓制の鞭に泣けるもの
この勇ましき朝鷄の
生命あふるゝ警聲に
永劫の悲愁をうちすてて
自由の大旆をひるがへせ

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

救世軍ブースと田中翁

田中翁が救世軍に入隊せられた云々は事實無根の取沙汰に過ぎない。其れに就ては翁が直接讀賣新聞に宛て、辯解して居らるゝので燎らかである。然れど此の風評は所謂全く煙の無き處に現はれし火であらふかと云ふに決して然うではない。否、煙とも見紛ふ程の叢雲は田中翁自身に在つたのである

其れと云ふのは之れである。東京座に於けるブース氏との會見である、近來次第に宗教的色彩を帶びられた翁は、ブース氏に谷中問題を紹介して多少援助を得んと期せられたやうであつた

翁が氏に會見せらるゝことに就ては余輩は强ち反對しないけれども又敢て希望もしない。況んや谷中問題を紹介して援助を求むるが如きに於てをやである

社會問題の多くは政治問題であるが故に解決に艱難なのではあるまいか、否政治的分子の多く含まるゝ社會問題程艱難なのではあるまいか、而して谷中村の問題の如きは殆んど全部政治問題である。村民對政府の問題である。然らば救世軍は何者ぞ。彼れは政府を恐れ慄いて居る一味の團體に過ぎない。之に觸れざる樣に努めたのは既に昨日の彼れで、今日は政府と結托せんとしつゝあるではないか

憐て、は可けない。ブース將軍は貧しき人を愛するよりも其人を救ふ！事を愛してゐる。人を愛するよりも事業を愛する人道正義を想ふよりも救事軍の發展を願ふてゐる。イエスキリストよりも聖書の文字を信じて居るのである。彼れは日本と名づくる土地に住む五千萬の同胞を眼中に措ない、唯だ日本國家を營み之を代表して居る者、或は權力を持つて居る者に媚ぶる爲に來たのである。噫世の善人及聖人諸君！卿等が如何にブース氏を賞揚すとも一小予輩は之れに與からない今や絶命將に葬られんとしつゝある谷中の難問題を提げ至り斯の世界的大偉人なるブース大將に會見して何するものぞ。斯の故に予輩は翁とブース氏との會見に贊同しない、却て反對の意見を陳述して縷縷翁の反省を求めたが翁は其の意を斷行されたのであつた

學生の爲めとやらにて講演會が開かれた彼の日に田中翁はブース氏を東京座に求めて其の得玉ひし榮は僅々數分間の謁見のみ、谷中問題を語るは愚か何一つ告ぐることも憚はずして唯氏の大說教の一傍聽人たるべく別席に案内せられ玉ひしとか

個の事實を耳にしたる予は翁の爲めに深く嘆息した、然かも之れに因て予は翁をして幾分ブース氏及救世軍なるものを識らしめた事を悦んだ。同時に轉倒！と獨語するを禁じ得なかつた。何故ならばブース氏が田中翁を訪はずして田中翁がブース氏を求められたからである、而して看よ、ブース氏は來遊中何を爲せしや、予輩今喋々の閑を有たない。目ある者は見、耳ある者は聽いたであろう。唯實に悲しむべし大日本の國民は見ても見えず聽きて聞えざる輩である。而かもブ氏が陸海軍の諸大將を始じめ地位高き有司の面々を歷訪するに忙がはしかつたのは最早や打ち消し得ない事跡である

想い見よ、イエスはニコデモを訪れしや、否々然らずである。却て夜の目にこそと求め來しニコデモに『生れ更れ』てふ宣告を與へ立ちて自から稅吏罪ありと言はるゝ平民階級に足を踏み入れたのである。此間の眞狀は今に其の信者にすら解されてゐないではないか

吁彼ブース氏を戴ける救世軍なるもの、今日は神を恐るゝに優りて此世の國王を畏れ人を畏れ權威を懼れ遂には彼等と妥協して何時しか基督を賣品と爲し終つたではないか。勿論今日の教會、牧師、凡ての信者は殘らず然うであろふ。豈に慨笑に價せずやである、彼大將に此部下あり、要するにブース氏は非凡の人である。キリストの名を語りつゝ、創めし神の仕事にして遂に彼を賣りつゝ之れを營む處の大事業に至らしめたる大事業家である

而して我田中翁は何人ぞ。彼れも亦非凡の人である彼れキリストの名を語るに至らずして而して語らず、況んや其名を賣る事をや、とは言へ彼はキリストの心を有てる異邦人であつたのだ。知らず其心を體現せる一小預言者である。

田中翁とブース王と相似る處があるとするならば其れは何れも時代を知らないと言はるゝ廉ではあるまいか而して吾人は田中翁に對して文學とか思想とかの上に望む可らざると同時に、ブース氏に對しても要求すべきでない。而して前者は後者の何者なるかを知らず、後者は又前者の何者なるかを識らざる點が一致する。

而してブ氏の宗教界を下りて而かも爲政者と結托し若しくは其の奴隸となりて二人の主に事ふるに引き替へ田中翁は政界を去りて其足全く穢れみ賤ます、當に神と抱かんとして居らるゝの事とさよ。ブ氏が自からの身の穢れたるを知らざるが如く、田翁は我が手の神と操りつゝあるを自覺して居られない。兩偉人の差は遂に量色の差にあらずして質の別である

噫、身に世界の榮譽を浴びて心成功の讃辭に醉へる救世軍ブース！卿は事業の擴張に歡喜しつゝ、歌へよ叫べ卿はキリストが憐れみ愛しめる平民を叱責し、飜弄し鞭撻してユダやの善人等と共に彼等を罪人と呼ぶ、知らず其間爲めに僞善にして、惡魔の奴隸たる大罪人等と共同して此世の權威を握らん。卿よ卿は何處までも覺むる事なし。顧みれば身窄らしき我が田中翁！迫害と侮蔑と貧苦と擯斥の淵に沈みて枕する處なく、遂に羅馬兵の手に落ちてカルバリに釘けられん。翁よ翁はキリストと共に十字架に殺されよ（遠雷生）

海内時事

美以教會の合同

五月二十二日よりの日本美以教會の合同總會により愈々合同を實行して純然獨立の日本基督教を樹立するの方針を確定したる由に傳へ聞く、偖ても合同の流行する時代に候はずや。而して教會の獨立に急ぐもの又最近の著しき事實にして教會自身は之れを發展なりと云い進歩なりと申居り候へども其の事實の眞相を直覺すれば獨立とは單に外國宣教師若しくは傳道會社の補助より離れしと云ふに過ぎざるのみならず、日本に於ける彼等の位置は却て非獨立の量を增せるものに候彼等は外國の金を貰はずと云ふの明あり而かも日本國の金を貰ふの事實と其事實が如何なる意義を有し其結果の如何を知るの智なきものに候はずや。彼等にして眞乎の獨立即ち牧師傳道師個人の獨立を斷行するに至らずんば其の獨立は遂に彼等の墮落と俗化の端緒に外ならず候、見られよ教會の獨立を遂げずば牧師は食を得る能はじ、仕事をする能はざるの結果は金持の尻を追い廻るの醜態を演じつゝある次第に候。更に見られよ彼等が合同一致して如何なる結果を呈せんとせしやと云ふに所謂『日本的基督教』の樹立に候是れに就て他日『日本的基督教とは何ぞや』と論じたく存候。要するに基督教も益々墮落に歩を進めつゝあるは蔽ふ可らず、而して美以這般の合同は美以の一段墮落なるを知らざる可らず候、日本を基督化すべき教會は、否基督教は彼等の爲めに日本化せられしものに候噫

二少女の悲劇

五月二十三日の夜牛込見附の甲府線路に轢死せる森茂ふさ子（十八）は數年前養女となりて栃木縣下の叔母なる人の家に居りしが、一昨年叔母病死して家に復へるの歎むなきに至りてより、僅かばかりの遺產を纏めて牛込の實家の厄介になり居たりしに苛酷なる實兄夫婦あり剩へ父母の冷淡なる待遇に得堪へずして雨夜の濕めかなる窓下に泣き明かせしは幾度ぞ亡き養母の俤を偲びて涙に咽びしも數々遂には死を以て可惜美くし花は我と自から散り逝けり

其の比、又もや神田三崎町の藤川美津枝（十七）なる少女は、資產を目當てに實母が明治大學生なる某に娶せんと迫まるに因りて、戀夫の土橋靜雄との望みは遂げられじ、情死の結約までしながら何時か靜雄の戀の失せ去りしを嘆き、獨り劇藥を嚥みて死せしなり、噫少女の自殺！兩女の悲劇！

青年男女の自殺數の日に加はるは統計の敎ふる處にして特に少女の死の增ゆくは目前の事實なり之れみな呪ふべき文明の犧牲にあらずや然り彼等も其の數に加はりて束縛せられたる自由、奪はれたる戀愛、道伴なる人生の旅の情に渴き果て、は其の生きんとする生命の根を絶より外なかりし兩女の死は共に實母に負すべき罪狀あり一は壓制にして他は冷酷何れも金の問題を離れず、而してふさ子が實母の冷淡と實兄等の苛酷に痛める青春の胸の裡養母の愛を呼び求むれども既に亡き人の情は生ける心に應なく唯死のみ之れ生命の友なりしなり美津枝は其の實母に反きて靜雄と添んとし死を以て戀に生きんとせるものを靜雄の戀は死を避くる迄に冷却し居たりしなり。此處に見過ごす可らざる者あらずや其は靜雄なる男子の戀なり彼れは美津枝を愛し戀すれども共に抱きて彼女と死するを得ずして止みき美津枝は靜雄との戀に生きんが爲めに彼と死せんとし靜雄は生きても美津枝と樂しく暮らさんとしたるも得ず、遂に此故に其の戀を捨てしにあらずや

田中翁の控訴公判

去る廿三日控訴院第三號法廷に於ける公判の模樣は翌日の諸新聞によりても詳しく報道せられ候毎もながら翁の眼中唯だ正義人道あるのみ虛僞と曖昧の陳述を以て始終を一貫せる證人巡査榊某に對して法廷の肅靜を破れる『虛言を吐くな』の大喝聲の如き裁判官を始め傍聽人に至るまで谷中村の問題が如何に複雜にして爲政者の所措が如何に巧みに枉曲を隱閉せる一大事件なるかを偲ばしめ候へき

さるにても斯の公判の終局は如何に成り行くべきや其の或は無罪となり有罪とせられんも谷中問題の眞相を探究し不當買收の根本を檢擧せでは斯の官吏侮辱の一小事件の正公なる判決や見る能はじと恐惶せられ候何れは來る六月八日午前九時同法廷に於ける公判の結果を待つの外なし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

再び戀愛に就て

遠藤友四郎

（一）性慾は神聖なり

何處の罪の子ぞや性慾をして罪惡の種なりとせる者、性慾若し罪惡の種ならば人間其ものが全く罪惡其ものなり、人間が罪惡其ものならんには彼の信ずる神は罪惡の製造者に外ならず、斯くて宇宙は根本より罪惡也、惟ふに性慾をして人性の惡しき素質若しくは性能なりと觀ずるに至れるは迷信の結果にあらずや、食ふ事若し神聖自然の者ならば、兩性互に相戀ふ事も亦神聖にして自然なり、噫何處の惡ましき僞善者ぞや性慾を恥ぢて自から汚がし戀ふ者を審きて之を鞭ち、而かも戀はせざる者の橫暴と權力とを讃美して道德なり宗敎なり神よ法律よと額き祭るにあらずや、人性の善惡如何は議論に非ず神の存すると否とは問題にあらず、人は自然に進化し發展して絶えず向上せん、而して人は人の自然性を制束するの權能を有せざるなり

（二）自由戀愛の意義

然れども世に自由戀愛の意義をして放埓なる一時的慾交なりと做す者あらば开は甚だしき誤謬なり况んや自性の慾求を滿さんが爲めに他性の自由を奪ふが如きものをや自由戀愛を危險視するの徒は所謂是を强姦と同一視するものにあらずや吾人の所謂自由戀愛とは肉と肉と徒らに相交はるにあらずして人と人と自由に相戀するにあり斯の意義を解し殊に自由を體現するに至りて始めて戀愛は神聖なるものなり

（三）基督の戀愛觀

日本文の新約聖書は錄して曰はく凡そ婦人を見て色情を起すものは既に姦淫したる者なりと、然れとも靜顧せよ人は必らずしも異性を目擊して肉慾を發作する者にあらず、之れ恰も食物を見て必らずしも食慾を發作せさると一般寧ろ見接する事なくして慾情は勃發するに非ずや、宜なる哉日本語の聖書は原文を誤譯してその眞を傳へざるもの也即ちキリストの言へるは色情を滿たさんかため異性を見るものは既に姦淫の罪兒なりと云ふにあり吾人の觀亦之れと一なり一時的衝動的の慾求によれるもの未だ戀愛の完全なる要求にあらず、故に此の慾望を放逸にするこれ自由戀愛にあらざるや明らかなり

（四）完全なる一夫一婦

自由戀愛によりて結ばるゝ一夫一婦や之れなきにあらず若しあらば其夫婦は實に幸福なり彼等の間には嫉妬もなく矛盾もなく欠乏なく秘密なく且つ一夫一婦の主義もなくして而かも一夫と一婦相愛し相戀して互に相親しむ宛然竭きざる泉に甘き水を掬むが如し、然れども世上果して如斯一夫一婦若干かある願ふに人は千差萬別無限無制の趣味あり理想あり要求ありて存す故に夫婦の間にありても必ずしも萬事互に充實するを得ず、然れば見よ世の多かたの男子と女子は其一人の夫と一人の婦によりて未だ滿足せざるにあらずや、之決して罪惡にあらず、幸にして一夫と一婦と多趣味多樣の才性を具有し永遠の世までも契るを得んか、开は誠に天賦の幸福なり

（五）夫妻は朋友なり

吾人はかの陋固たる夫妻の觀念を打破して以て朋友てふ觀念を据えんとするものなり然り夫妻にあらずして男女の朋友なり特別なる友人たるに過ぎざるなり威服なくして心服あり玩弄なくして敬愛あり信賴あり專橫嫉妬なくして自由扶助あるもの之自由戀愛に結ばれて、一夫一婦間に成立せる特別の朋友なり廣義に於ける生殖の目的の爲めに結合して共同の事業を營まんとする一個體也、廣義に於る生殖の意義とは何ぞや、即ち生て育て生しめて育たしむる永續無窮の一切を包含す

海外時事

△露國革命黨の拷問事件

露國リーカー監獄に於ける民主主義革命黨員拾七名拷問事件一度議會に曝露するや政府は狼狽を究め答辯に窮して右拷問器械をば民間犯罪者より沒收したりとの遁辭を爲せしも开は言ふ迄もなく虛僞にして世にも怖ろしき慘刻なる拷問の眞相愈々以て蔽ふ可らざるに至り惡虐なる政府も遂に暗中に葬むるを得ず頃者典獄の轉任を爲し新に憲兵大尉にして警保局に勤務せるコミサロフをして前典獄の補任とせり

同人の經歷に就ては露國政府の大秘密に係はりしものなるを元内務書記官にして第一議會に當選したる議員ウルーソウ公爵の爲めに議場に曝露せられ政府は近來の大打擊を蒙れり

新任典獄コミサロフは警保局の秘密室教唆煽動虐殺激文印刷の機密主任として惡逆なる露政府を助けつゝありしなりとぞ

△警保局内の秘密室

露國に於けるポーランドアルミニヤ猶太人の虐殺は世界の耳目を聳動すること一再に止らず其都度都市の騷亂を見軍隊の壓制跋扈殆んど絶頂に達したるか其原因動機に就ては捕捉す可からざる隱約の間に惹起し來るを常とし適々之れが激發の導火とも見るべきものは

常に忽焉として何れよりか現はれ出づる過激なる煽動的檄文なりしが此檄文か虐殺毎に夥だしく配付されつゝある事實に就き何人も之を熟知せるに拘はらず其何人の手に成り何れの方面より撒布せらるゝかに至りては當時出沒自在の怪智神の如く稱せられたる革命黨の探偵隊も遂に之が發見するを得ざりき

然るに何ぞ計らん此檄文の起草者にして配布の指揮者は新典獄に任せられたるコミサロフ大尉其人にして其印刷は警保局の一秘密室に於て行はれ居たるものならんとは

此秘密室は警保局の一部にありて局内官吏も之を知る者殆んとなく假令之を知る者も其出入を嚴禁したれば何の爲めに設けられたるかを知る者絶てなかりし

△秘密印刷に從事する一日本婦人

即ち其主任はコミサロフ大尉にして其下に三名の婦人を使用し專ら印刷に從事せしめたるが玆に更に奇怪なるは三名の婦人中に日本婦人一名ありしことにて月給三百ルーブルの高給を與へ他の露國二婦人は其半額を給されて居たり

本問題の暴露と共に一層の疑問を招きたるは日本婦人が如何にして此秘密に干與せしやといふ事なり而して意外の驚きとなりたる由

要するに日本婦人は能く秘密を嚴守するを以て使用上之を重寶と認められたるが故に此秘密に干與するを得たりとせられし迄の事なりしとぞ知らず如斯婦人をして露政府は其敵なる革命軍に隱匿し置かすや否や

世界の女中問題

と題して去る二十六日の二六新聞に左の如き記事有之候

工業の發達は女子の職業を熾んならしめ從て世界何れも下婢の缺乏を訴へしむるに至り取扱ひの改良俸給の増加等にては滿足せず獨逸にては「下女」の如き名稱を廢し「家事補助人」なる名を下婢に附せんとの議起り某夫人は工業勞働の婦人と同一制度の下に「下婢」を使傭する意見を發表せり又紐育下婢會は主人が下婢の業務に干渉したる時は直にボイコットを行ふべしと決議したる由

呪ふべき文明所謂工業の發達は惡むべし女子の職業をして熾んならしめ候、斯くして大多數の女子をして其の天職を奪い天性を偽つけ「金」を以て勞役を賣るの休むなきに至り「其處に人間其者と資本其ものとの交換」てふ現象は漸々男女の區別を抹殺して一概に資本主の奴隸となり果て、哀れ食ふ爲めに生きる動物となり生きざるべからざるが爲めには食を求めざるを得ず、斯くて乞食となり盜賊となり賣淫婦となり奴隸となりても甘んせざる能はず候、而して取扱ひの改良俸給の増加等にては滿足せず下女の名稱を廢せんとするもの今更ならぬ當然の事に有之候、吾等は更に記せざるべからず、嘗に名稱を廢するに止まらず其の實を廢する事の要務に候、之を換言すれば、凡ての婦人をして皆自己を主人とすると同時に又自己を下女とする事に候、「下女」を工業勞働の婦人と同一制度の下に使傭する「位は何の嘉すべき事や候べき、奥樣と同じに過せらるべきに候はずや、此處まで至れる者世間果して幾人有之可きや、吾等は斯名稱の無き女中が奥樣と言はるゝ人の間に多々有之を認むるものに候

桑港に於て日本人迫害せらる

先月二十二日より二十三日に渉り桑港に於ける日本人の洋食店に白人五十名計り襲擊し爲に顧客は毆打され店頭は破壞され其の勢い猖獗を極めて頗る騷然たりしといふ。加州其他に於て一度日本人迫害の事起り其氣次第に瀰漫して既に日米戰爭の豫評をさへ逞ふせる折柄日本政府は何等嘉すべき術を施さゞるのみならず甚だ怠慢にして憶病遂に爲す事もあらざる間に又々此事あり吾等の見解に因れば今に於て速かに日本政府が强硬なる態度を以て彼の國に交涉し彼をして自國の問題を解決せしめずんば他日盜賊の來るが如くに日米の戰爭は來らむ、あゝ戰爭！吾等婦人が戰爭によりて享る危害は男子よりも甚だしきを記憶せり否な戰爭は平民の敵なれば極力之れに反對せざるを得ず。社會主義者を迫害する日本政府は米政府に迫まりて勞働者問題の社會主義的解決を見んとするが如きは元よりあり得可らざる事なれど、此現象をして等閑に附し置く可らざるを告ざる能はず、借ても氣の毒に堪へざるは迫害せらるゝ日本人と迫害する白人即ち兩國の勞働者也

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

社會暗黑面の研究

密航婦誘拐

細井吼崖

社會の闇黑面を仔細に觀察したならば、見るに忍びず聞くに得堪へぬ慘状に乏しくない、爰に掲ぐる密航婦誘拐の如きも僅かに其一である。

△密航婦の種類　一概に引括めて密航婦と言ふが、區別をして見ると隨分樣々な種類が含まれて居る、十善寺や管内邊で土方人足又は支那人を對手の淫賣婦もあれば、稽れつ枯したちやぶ屋の酌婦もある朝から晩まで眞ッ黑になつて漢子と一緒に沖働をして居る石炭人夫、カン／＼虫（船舶の錆を剝落す職業）もある、前借金を返濟する見込のない娼妓の逃亡を極め込んだのもあれば、偶には子守女、下女なともある。併し此等は概ね自から進んで密航を希望する側で、掛け口のない代物と相場が極つて居る、從つて誘拐者は餘り此種の密航婦を歡迎しない、矢張り手數は懸つても田舍廻りをやつて、ぼつぼつと田舍娘を拾集める

△密航婦の相場　誘拐者は密航婦の事を普通「玉」と稱し、標緻の能いのは上玉十人並が中玉、醜いのは下玉と唱へて居る、内地で甲の誘拐者から乙の誘拐者に賣される相場は上玉が五十圓、中玉が四十圓、下玉が三十圓、内外で、巧みな誘拐者になると一ヶ年に二百人位の密航婦は造作なく誘拐する事が出來る相だ、一人分平均四十圓と見ても一ヶ年八千圓の收入はある、そして之が浦鹽斯德とか上海とかへ連出しさへすれば、一人分平均三百弗には賣れるのである。

△誘拐の手段　誘拐の手段も樣々である機に臨み變に應じて、誘拐者の舌は横に縱に、途方途轍もない法螺を吹立てるのであるが、先づ普通のやり口を一つ二つ紹介して見やう誘拐者は、天草、島原、諫早、佐賀の五島の樣な、比較的他地方よりも多く密航婦を出す土地へ商人體若くは紳士風に化けて入込む、そして、自分は幼少の頃から浦鹽斯德へ渡つて現時では上海に雜貨店を開いて居るとか、口から出放題べら／＼と嘘八百を並べて置いて、歸朝の序でに婢女を一人雇入れて歸りたい、月給は一ヶ月十五圓から二十圓位迄奮發しやう、希望者はあるまいかとやる、併し此等のは最う幾人も行つて來た陳腐い手段なので、對手の方で即坐に誘拐者だなと感附いて終ふ、其處で誘拐者は浦鹽、上海等の語を避けて、近頃では專ら朝鮮を振回す、長崎縣人の耳には、朝鮮は直ぐ隣縣の如に聞へるのでさして遠方とも思はないからだ、併し中には全然海外渡航を口にせず、長崎門司へ連出しさへすれば何うにもなると、高を括り、御都合の能い樣な法螺を吹く、それは誘拐者自身が直接に父兄に說くのではなく、人をして說かしめるのだ、長崎（若くは門司）から貿易商人が來て何々旅館に泊つて居るが、此頃迄使つて居た下女が病氣で亡くなつたので候補者を欲しがつて居る、最も彼地には幇で擧く稼女が剰餘つて居るけれど、孰れも此れも御轉婆で手に餘る、桂庵からぢや碌なのは來ないし、是非共堅氣な田舍娘が欲しい閑暇な時分には裁縫の道も稽古させやうし、望みとあらば茶の湯活花も習はせて苦しくない、相應しい緣でもあつたら媒介者にもなつてやらう、と勿體な過ぎる程の思召、何うだ李兵衛樣、娘の花樣を御奉公に出しては、願つてもない出世ぢやないか、と攔まされて居る丈けに必死となつて說附ける、娘の立身出世と聞いては誰しも嬉しさの思ひに胸を波立たせるが親心の闇、つい／＼と口車に乘つて十圓乃至二十圓位の月給の前借で可愛い娘を手放して終ふ向か尠くない。

△警察官の買收　小し手硬い警察署の管轄だと思ふと、誘拐者は直ぐに警察官を買收する、見込さへ立てば時として警察署全體を買收して終ふ、一警察署の買收費は大抵二百圓内外、いくら頑固なのでも五百圓以上を要せずして濟む相だ、何しろ巡査とか部長などと云ふ輩は、妻子を養い兼ねる薄給で、平常から窮乏を訴へて居るのだから、兎角黄金の魔には魅せられ易い、素より道途の風說に過ぎないだらうが中には警察官が誘拐者の手先となり誘拐者の爲めに都合の能い報告をして種々の便宜を與へる、やれ何處には上玉が居るとか、彼處のは中玉だけれど高更捨てたものぢやないとか、甚しいのになると、我輩が一番親讓を說伏せてやるから一人前に付て五圓宛の報酬を寄越し玉へなど、、圖々しい事を言出す者もあるとの事、小羊の樣に從順な田舍漢は、斯の如くにして己が愛娘を、蛇の如き心ざまの誘拐者の手に委ね去るのである。

△誘拐に勝る誘拐　誘拐された密航婦中偶々一二人の成功者（？）を出すがある某新聞紙上にも謳はれた花簪のお島とか五十萬圓の資產を作つて故山に錦を飾つたボルネヲ島の馬渡お寅とか、此等一二人の成功談が輪に輪を懸けて津々浦々に響き渡る、そして仇氣ない田舍娘の心に虛榮の波を高ぶらしめる、之は實に誘拐以上の誘拐で、恐るべき危險を產出す動機となるのである。

△憐れむべき密航婦　扨て愈々誘拐者に連れられて門司若くは長崎に着いたとする、旅館へ一時に數名の婦女子を連れ込んでは即時に其筋の注意を惹く虞れがおるので、市内各所に散在して居る共謀者の宅へ、一人／＼引離して宿泊せしめる事となる、嗚！憐れむべき密航婦、彼等は既に此時、甲の誘拐者より乙の誘拐者へ、上玉中玉下玉の相場に準じて賣渡されて終つたのである、其麼事とは夢にも知らず、衣類を新調して呉れたり、演劇を見に連れて行つて貰つたり、下へも措かぬ待遇、されるので、ポット出の田舍娘は唯尤う夢に夢見る心地、兩親の膝下を離れて身は雲山隔絕の他鄕にある悲哀を打忘れ、樂しく笑ましげに其日／＼を消すのである。

△下級船員の買收　恙なく海外に密航の目的を達する迄には、誘拐者の爲めに最も恐ろしい關門が四つある、水上警察署下級船員の買收、海港檢疫所、それから今一つ、先方へ入港して上陸の際、案内漢の包圍攻擊を受けるのとである、で下級船員の買收は少許の鼻藥を嗅がせれば容易に話が纏まるので、比較的造作はないが、其他は中々難事業である、大概間々警邏巡査の目を掠め四五名位を一艘の解船に乘せて四五回に亘り密そり本船へ送届けるのだ、すると、下級船員は直ちに此等の密航婦を、船艙内の石炭貯藏所、若くは積荷の間等、詮術所、土窟の樣な所へ押込んで終ふ。

△水上警察署は啻に水上署のみではない少し事が面倒だとさへ見れば、誘拐者は即時に買收をやる、水上署の如きも豫め夫々買收運動を濟してあるのだが、狡猾い巡査に遇ふと瞞らない、故意と四角張つた顔附をして、密航婦を押込んである部屋を點檢べやうと懸る、そして體裁の能い強請をやるのだ、

△沖台から本船へ　水上署の次に海港檢疫所と云ふのが控へて居る、折角船へは乘せたものゝ、港を離れない間に發覺したのでは、密航婦は殘らず國元へ送還され、誘拐者自身は移民保護法違反で獄へ投せられる、其處で誘拐者は此の二關門を通らずに濟む間道を考へた、それは他でもない、五島沖合又は口の津港外等、陸地から數浬を隔てた海上へ密航婦を解船で送り出して置いて、事によると四五日間も一週間も波間に漂はせた上、漸つと到着した本船へ夜間秘密に乘込ませるのである、之は頗る危險な方法で、現に去年の如きは五島沖合で激浪の爲めに解船が轉覆して密航婦の內二人迄行衛が不明となり、一時囂しい物議を惹起した事がある。

△出帆後の虐待　去年ペライツボウの愛國婦人會から某所へ達した哀訴狀がある、出帆後の虐待を偲ぶ方便ともならうから左にこれを摘記する事とした。

私共は昨年七月十五日多〇〇〇と申す惡人の爲めにまんまとだまされ今は知らぬ他鄕に血の涙を流すあはれ果敢なき身と相成申候、最初多〇〇吉が、朝鮮へ行けば金が儲かる、月給は十五圓位と申せしにつき、朋友兩三名と共に渡海船内に乘移されたるところ、先發者二十四名ありて何とも合點ゆかざるに、其中に私共の知れる者も混り居り候故、樣子を聞けば遠き外國へ密航するとの事、私共は大いに驚き、朝鮮に行くも外國に行くを好まずと申し候ところ、最早上陸を禁じ番人を附して嚴重に見張り（中略）口の津及び大島邊海にたゞよはせ晝夜同樣なる取扱なし、食物は二日に一度、又は三日に二度、夫にし食への樣な粗食を與へ實に言ふ極まる虐待をなした上に多〇及び乾分の者より誰彼れの差別なく強姦され悲しさ口惜しさ限りなく（中略）八月二十二日一の大藏船に移され、多〇の乾分仁市と云ふ者に連れられて香港に渡り候、海上七日は暗室に閉ぢ込められ一日に握飯一個づゝにて僅々半死半生の思をなせるに、惡黨人の多〇は素より乾分の誰彼迄ては大夫水夫等に迄毎日／＼強姦せられ（中略）香港に到着し秘密に上陸して密船宿、直井なにがしに宿泊し、三日目に多〇が來りし爲め、私共二十六名に又々新嘉坡に渡り、[illegible]驛太郎と云ふ婦人仲買人兼密航者宿に揚げられ、右の驛太郎に四百弗平均に賣はれ夫より地方の女郎屋の親方に賣られ、ちり／＼ばら／＼と相成候、只今ペライツボウには私共七名のみ殘り居候（下略）

△證明書（斷就）　汽船が浦鹽若くは上海へ到着すると無數の無頼漢が解船で漕ぎ附けて、ぐるりと汽船を取卷いて終ふ、若し密航婦誘拐と見れば容赦なく脅喝する、誤つて此等の無頼漢に抵抗したり強請に應じなかつたりしやうものなら、忽ち領事館へ訴へられて、飛んだ辛い目に遇はされる、此麼な場合に必要なのは親分から（多〇の如き）貰つた證明書即ち暗號である、これさへ知つて居れば彼等は毫も危害を加へぬのみか、非常な利便を與へて呉れる相だ、

△密航誘拐の親玉　本年二月中旬門司市東堀川町三丁目の某酒店で逮捕された密

（第五頁の下段に續く）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科(三)

増田操

凡そ教育と迷信とは恰ど兩端を天秤に掛けて擔ふたやうなものであると云ふが教育が昇れば迷信が降りこれに反すればこれと反對の結果となるやうである人事の迷信は文明の人に少なくして野蠻の人に多い。男に少なくして女には比較的に多い、其の迷信の種類を一にして足らず或は動物に鑛物に植物に彼の王子稻荷の如き澤藏司稻荷の如き威光稻荷の如きは東京の人が穴の中なる狐を拜するが如し、「白蛇の見ゆるは柳島」と歌はれたる柳島妙見は蛇を祈り宮守の黒燒は今尚ほ買ふものありとか皆な動物に就ての迷信である、雜司ヶ谷の鬼子母神に子授銀杏あり子を欲しがる女、來つて其木に抱き付き其樹皮か又は葉を肌に着くれば子生ると板橋には緣切榎あり其木の粉を男女二人に呑ますれば緣が斷れるとかこれ植物に對する迷信である、淺草觀音堂内にて砂を嚢に入れて賣るものあれば又買ふものもある聞く此の寺に詣るものの日に數百人なるが故に此の砂を購つて店前に散布すれば常に客足斷へず隨つて家が繁昌するとか、本所回向院では鐵小僧其他墓石の石片など賣るものあれは買ふものありこれを携帶すれば賭博に勝つとかこれ鑛物に就ての迷信である由來我邦農家にも迷信の繁や頗る多いが前號より話の序でだから稻の種子の迷信に就て一例を書いて見やふ、稻の穗に就て雌穗、雄穗と云ふことがある、穗の第一節に二枝を有するものを雌穗と云ひ一枝なるを雄穗と云ふ從來種子を撰採するに當つて雌穗を貴び雄穗を不可とせるものゝ如し其雄穗を撰んで雌穗を得んとするに至つては學理の未だ開けざる時代に於ける一種の迷信に過ぎないのだこれ稻は一花兩全即ち稻一粒中に於て雌雄の兩性あるを以て穗に雌雄の差別がない、若し試みに一粒を一株として養成して其穗を檢するも其種子雌穗より撰めばとて雌穗のみ生ずるものでない、二枝一枝共に混成するものである雄穗を撰めばとて又然ふである今若し稻の種子の良否を科學的に講究せんと欲せば玄米一粒を取つて見よ種子は必らず二部より成るものである即ち其一部は種子の一方に偏在し他の大部分に比すれば其色少しく異つて鹸胚がある此の部分は種子中最も緊要なる所にして彼の發芽して莖葉及び根となり更らに成長して子實を結ぶべき胚芽及び幼根は此内に包藏する所である他の大部分は普通吾人の食料に供する所にして種子の發芽の後、幼植物の未だ空氣中又は土中より養分を吸收し難い時に於て養分を供給するが爲に豫め蓄ふる營養分であれば此の部分は莖葉となるものでない、斯の如き構造なるを以て既に發芽後成長の狀況如何は全く此二部の如何に因つて差異を生ずるものである即ち種子中胚芽及び幼根の發育不完全なる時は如何に營養分多きも到底良好なる生育を遂げ難くこれに反して胚芽及び幼根如何に充分に發育せるも營養分少なき時は又同樣の結果となる故に種子として良好なるものは胚芽及び幼根の完全に發育し營養分の多量なるものはよいのである

忘れな草

神川松子

暗愁の夢に
寂び渡れるこの世
赤誠なく、光輝なく、平和なく
人は饑餓に泣き
世は嵐に荒ぶ
胸は愁腸に亂れて
面容にやどす影
人の世の寂寞をぞ語る。
味氣なの此の世を呪ろふ
花時の春をもあざみ
獨り湖上の幻に
露けき袖を潤せば
澤水に鳴く蛙
あはれ夢遠き
古りし歌文
歌ふもこゝろ憂き。
うつら〳〵現つの裡にさ迷へば
春の宵月夜笛の音
なにさゝやくや人の子に
憂きふしさえて思はしげく
音聲もおどろにたえ〳〵に
月に涙の影くもり
寂びて潤ふ眉凄く
默して語る思ひやいかに。
多恨の遊子詩人が
懷に抱く革命の
噴恚の魂に想をこらし
遠く仰いでいや遠く
望む烽火に笑まふ時
血汐は激り
たをやめの胸は狂ほし。
狂はし＝狂はし＝吁狂はし
犧牲を語る我が世
親を捨て、身を捨て、戀を捨て、
狂調亂打の裡
われは逝かむとす
今はたゞせめてもの忘れな草
一枝君に
あつき情思のしるしにて。

谷中村買收事件の演説會

豫定の如く去る二十八日午後五時より神田金輝館に於て開かれました。元より營利的の會で無い五錢といふ入場料で屈指の辯士方の顏揃へだから定刻前既に四百に近い聽衆が潮のやうに詰めかけました。僕が司會者として簡短なる挨拶で愈々始まつたのが五時十分、辯士は毎日社の菊地氏から高橋秀臣、信岡雄四郎、松村介石、木下尚江、田中正造、田中弘之島田三郎等の諸氏でありました。辯士と演説の色分け嗅ぎ別けをして僕は會主の一人でありながら可笑しく感じたよしもありました。要するに谷中問題の爲めに出演せられた辯士は、折ふし何う云ふ譯やら警察から出張が無かつたので、思ふ存分演られたやうに聽きうけた。散會は十一時聽衆一千五百。久振りでの木下さんを待つて居た聽衆は大分あつたらしかつたが同氏の演説は極めて短かくて、或人は不得要領だと云つて居た併し僕には要領が掴まれた。けれどもあんまり懺悔の口調が多くて或人がアー云つたのも無理では無い。

エンドー

編輯室より

本誌は本號から赤刷を廢めましたそれは第一印刷代を減ずる爲め第二手數を省いて發行を急ぐ爲め第三赤色があまり好ましくなくなつたからです自然に驅られてした改良が却て進歩かも知れません兎も角く之れからは精々骨折つて是非とも定めてある發行日每にキチンと發行し且つ益々勉勵して一層内容のよろしいものを以て讀者諸君に見えたいと思ひ升それから又本誌の體裁や編輯などに付きましては讀者諸君に於かれましても此れから御遠慮なく親切に御訓示下さいますやう御願い申します本社は出來る限りの改良は怠らないつもりで御座います

第四面よりつゞき

航婦誘拐い親玉多○龜○の事に關して少しく記して見やう、彼は前後十三年間密航婦誘拐に從事して、不義不正の財に飽き、各地に數名宛の妾を蓄へ、門構への邸宅に起臥し、紳士然たる生活を營み、香港、新嘉坡、長崎、神戸に幹部を置き内地は隨所に、海外は浦鹽、ピナン、コロンボ等に支部を設け、幹分は二百八十餘名もあるとの事、誘拐者仲間で多○龜○と云へば神の如く敬はれて居る、この恐るべき惡魔の爲めに血汐を吸はれた誘拐婦女子は優に二千餘名を算しこれに依て得たる不正の所得は三十萬圓の巨額に達して居る相だ、一人の多○龜○は其筋の手に捕はれたが、千百の別箇の多○龜○は今尚隨所に鳥の如き眼を光らかして、能き獲物もがなと、ひそかに爪牙を磨いて居るのだ、考へた丈けでも悚然とするではないか。

讀者諸君！諸君は以上を讀んで如何の感想を抱かれたらう、僕は只こゝに事實を平敍したのみで筆を擱く事にする、併し社會は誰の社會でもない、皆諸君等の社會である。

(完)

讀者諸君に重々のお詫び

前回に寫眞版の說明を洩らしたりしは編輯央ばより、主幹編者病氣に罹り、他人代りて校正の任に當りしため、斯かる失誤ありしを氣付かずに校了致せし次第なれば、事情お諒察被下御容赦願上候、前第十號一面の寫眞は日本社會主義者金子喜一氏夫人米國人ジョセフインコンガー女史に候、金子氏は多年米國に在りて、主義のため盡瘁せられ、夫人亦同主義者として、新聞に雜誌に數々悲烈なる詩文を寄稿せられ盛んに革命を鼓吹せられ居候、昨年金子氏と鸞鳳の契成て春宵夢濃かなりと傳聞の儘を祝意に代て、斯くは愛讀者諸君にも御披露致したる次第に候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小說

志士の末期

二葉亭主人 (承前)

點檢が終る、十五分間の散歩も終る。と、今度は醫員の回診。其時彼は試みに問うてみた「もう、直きでせうな」と。回診の醫員も其意を領して「さあ、もう永くは持たんな、」といふ。

「凡そ何時ごろでせう」と問けば、

「さあ、一晝夜、永くて二晝夜しか持つまいて。此前診察した時な、彼時もう右の方の肺は駄目ぢやつた、左ばかりで持つとつたのぢやが、もう其の左も駄目ぢや。が、人間何時か一度は死ぬるものぢやで、何も悔むことは無い。私も永いこと監獄醫を勤めちよるが、どうせ此處へ來た者に助かつた者は一人ちやッてないのぢやからな。ぢや、今度は十號室でしたかいのう?」と、看守長を顧みて、足早に監房を出て行つた。

隔と戸が閉まつて一人になると、彼の面には言ひ知れぬ苦悶の色が顯はれた。固より死は願ふ所、疾くに覺悟はしてゐるやうなもの、此世に在るも今幾時と思ふと、流石に心臟の瓏まる如き感がある。

アッケルマンの詩に斯ういふ事がある。最後の審判の日に、亡者が天使の喇叭の音に復活して墓を躍り出る中で、獨り執拗も其墓を棄つることを肯せぬ者がある。仔細を糺せば、今更時候後れの天國の樂なんどで過去の苦痛を償ふべくもない、神は萬能におはすとも、爭でか我胸中に滯れる此苦き記憶の塊を洗ひ去ることを得むといふ。

「あゝ、彼には既に此苦き記憶の塊が有る。これあるからは最早生も樂しからず、死は固より願ふ所であるけれども、此薄暗い薄汚ない監房で、親しき人の面も見ずに、情けある言葉も聽かずに、此儘むざ／＼と死ぬことかと思ふと、何とも言へず殘惜しい。若し兩軍相接する時、砲烟彈雨の中に馳突して、紅の軍旗の下に屑よく討死するか、或は絞首臺の上で、衆目環視の中に、慷慨して命を授くるのなら本望であるけれど、こんな處で獨りじめ／＼と腐る如く死行くのは、如何にも堪へがたい。マイコフの詩に此處にして生きむも憂く、死なんも辛しとあるのは、正しく彼の今の境涯である。責めてはこの監獄の庭でなりと、青空の下で樺の梢に來鳴く鳥の聲風の音信など聞きつゝ死にたいが、今は夫すら叶はぬ、あゝと又しても嘆息の漏れるのを纔かに耐へて、今更歎くは愚痴の至りと思ひ返し、夫よりして責めてもの慰めに、餘り永くもなかつた我一生の大事小事、それなりと想續けて死なうものと、只管想を過去に馳するのであつた。

彼は先づ少年の時を憶ひ出した。田舍で育つたから、憶出すのは茫々として一望際涯なき原野や、其中を淺瀉と流れる野川やで、彼は此處で能く野禽を狩暮した、初て鴫を仕留めた時の喜びは今に忘れぬ。鬼の首でも取つたやうに、喜び勇んで家に馳還り、父にも母にも召使の者等にも吹聽し廻つて、皆に笑はれたが、獵の師匠は森番人の親仁で、見掛は極く無愛想で人好のせぬ性質であつたが、實は親切な好い老爺さんであつた。遊び友達は村の小兒で、一緒に能く惡戲をしては叱られたッけが、今から思へば其頃が實に一生の花であつた。

それから學校生活になつて、社を結んだり、秘密出版の禁書を耽讀したりして、一生の運命も稍極りかけたが、併し未だ手觸りの荒い實際を知らなかつたから、心に描く所は派手な花やかな空中樓閣で、光明の將來をのみ夢みてゐた。さて愈々實世界へ踏出してからの失望と煩悶とは如何ばかりで有つたらう。固より其間自ら樂なきに非ずと雖も、樂中にも常に一片の苦味はあつて、未だ世間に懸構なく腹の底から心ゆくばかり笑つたことはない。浮世は憂き世。憶出せば苦い／＼事ばかりである。(つゞく)

一雨一晴記

赤羽生

△四月廿日夜七時卅分、新橋發神戸急行列車に乘つて、雨の夜を西に指した。其の心の目算は小田原市外入反畑に新妻君とスウヰートホームの味濃かなる百瀬巨眼の新家庭を驚かして暫時戰敗の苦を忘るゝ積り△國府津迄の汽車賃七十九錢、外に急行料卅錢を取られた、御上では我日無く御取りなさるゝ事よと今更らながら敬服した△車室は殆ど滿員で、五尺に足らぬ僕の矮皮發を擠くに處無き位、實物な人間同樣に心得て居る赤毛布共に哀願して漸く座の一隅に尻を落着けた△汽車内の行商人君は室の中央に突ッ立ち『エ、諸君、賞榮の日本に博覽會地圖に血染の短刀と云ふ面白い小說を添へて定價は夕ッタ十錢』と頻りに紙帶を揮つて赤毛布君を懾に捲いて居つたが、其の効空しからず、彼方の隅、此方の隅より十錢銀貨の手が大分出た△車中、無聊なるまゝツルゲーネフの『父と子』を耽讀して其の奇嬌、奔放、熱烈なる筆致を味ひ、時々頭を上げて窓外の雨の音に耳をスマせた△面々たる春雨は平塚停車場を過ぐる頃より驟雨の響と爲つた、滾車の窓に轉はる點滴の音、而して淅瀝たる風聲、物凄かしき中に一種幽寂の氣がある△國府津で汽車を降りたのは九時少々過ぎ、早速湯本行電車に飛び乘つた、夜は暗し、雨は益々急、土地不案内の上に此の雨の夜では、殘すに少々面倒と、聊らすか心細かつた△見れば此の電車には一等二等がある、大いに嬉しかつたが、併し考へて見れば、紳士貴女と云ふ隣劣怯懦なる動物を隔離せよとの妖電富に運轉すべく造られたる電車會社の處置としては、蓋し己むを得ぬであらう、三等には平民と云ふ人間が乘る、一二等には貴女紳士と云ふ獸類共が乘るのだ△暗黑を縫ふて急走する電車の閃光は、宛然探海燈の如く、酒匂、小八幡杯と云ふ村々を瞬間々々に照しつゝ過ぎ去つた、九時半頃小田原新宿で電車を下りた、暗サは暗し、雨は愈々降り頻る、其の中を入反畑と聽き／＼泥濘の路を搜ねながら、アチコチと探したが、どうしても分らぬ、果てはヤケ氣味で、無闇矢鱈に歩行いた爲め、路傍の溝に陷り、ナケナシの洋服を腰から下ズブ濡れと云ふ滑稽を演じ、到頭往生して新玉町の或る安宿に轉げ込んだ、時恰かもヂャンヂャン々々火事だ々々、此の雨の中をさりとは氣の利かぬ荒神樣もあつたものだ△宿の女中君に頼んで火鉢にウント火をおこさせ、ズボンを乾かすやら、靴下を乾かすやら大騷ぎの後、綿の冷い夜具を引ッ被つたのは、殆ど翌朝の午前二時△廿一日、八時起床、夜來の雨は霽れたが、未だ降り足らぬ氣に見ゆる空模樣であつた、九時宿屋を出立に及び、苦も無く巨眼の家を尋ね當てた。嘻吁、巨眼は家に在らず、光は與へるものである、巨眼は生憎不在、新妻君としばし雜談して居る内に歸つて來た、相共にヤア、ヤアを交換し昨夜の出來事を話して果は大笑ひ△小田原の東海新報と云ふを見た、中に足柄上郡馬瀉村小學校に於て、此程御眞影を燒失した爲め、當直教員某は免職と爲り、校長某は懲戒減俸に爲つたと云ふ記事があつた、不可避變災の爲め御眞影を燒失せしめたからとて、其の教員のパンを奪へよとは、眞逆に大御心でもあるまいに、嘻々俗吏事を誤る△新妻君が心盡しの晝飯の御馳走になり、午後二時巨眼と共に家を出た、内山愚童和尚を國府津太平臺の白雲深き處に訪ふて大いに大事大事を談ぜん爲めであつた△御幸町より湯本行電車に乘つた、藝者らしい二人の紅裙が僕等の傍に座を占めて居つた、路に熱海人車鐵道の起點を過ぎる、僕は此處に、勤勉なる平民の子が憫憐なる紳士閥の爲に牛馬の役を足しつゝあるを見た。凡そ今の世の中の便利なる器械は多く紳士閥の利益の爲に造られてある、平民の利益の爲に造られたものは殆ど無い。而して偶々あるものは、唯だ平民の自由を奪ふ手枷、足枷、首枷斗りだ△常には紫水晶の如く澄き早川の水も、今日は石灰岩の如く濁つて居る、雨といふいたづら者の仕業だ、人間社會も又此れで、社會といふひねくれた惡戯者は、常に出者張つて人の心の奥より湧き出づる清き靈泉の水を汚して仕舞ふのである△湯本に着いたのは午後三時、例の福住の隣には富豪高田ハッタの大きな廣告がある、停留所前に東京ハ[illegible]の別莊がある、巨眼の說に依ると、此の高慢の山之神、何子と云ふが非常の豪奢で、金錢を湯水の如く撒き散らす、ソコで土地の人々は拜錢神と崇め奉つて、山之神御成の節は、車夫や商人は皆途中に土下座して迎へ奉るとの事だ△湯本を出拔けると塔之澤だ、此處には奸商喜八郎の別莊大倉久米島の綴門嚴めしき別邸がある、之れは人民の血と肉に依て建てられたる血の池、肉の城だ△路々眺見するに、早咲の谷躑躅花時に先つて紅血の氣焔を吐き、遲咲の山櫻時に後れて爛熳の美花を開いて居る、先つも後るゝも同じ浮世の運命のまゝなる其處をさかしはらしい△巨眼知れる所の時の茶屋に休息して駄菓子を摘みながら、林泉寺の和尚さんはいらッしやるかねと聽くと、主婦曰く、エ、御下りの樣子も見へねから、御座らッしやいう△勾配急なる善道を喘ぎ攀り／＼、愚童和尚の御座所林泉寺の山門を叩いたのは午後四時半、おーと答へて出て來しは氣の好さゝうな老婆さん、和尚樣はと聽くと、今朝方泊りがけに箱根の宿迄御出掛けになりましたとの挨拶△殘念此の上無けれども、餘儀なければ致方なしと諦め、名刺を殘してすご／＼と山門を出た、山門前に新しき中鐘が立つて居つた△歸途にはぶらり／＼と新道を降つた、路傍の古新聞の打ち捨ててあるを見、ドンナ新聞の殘骸かしらんと巨眼杖の先にて手繰り寄せて見ると、之れなん時事新報の文藝週報なりける、成程紳士閥の遊覽所に相應しき新聞△塔之澤にて箱根細工を少々買つた、湯本に着いたのは六時、直ぐ小田原に歸らうと僕は主張したが、大分汗も出た、一浴しやうぢやないかと云ふ巨眼の慫めに任せ、大和屋と云へる第三流の湯屋に飛び込んだ、湯槽は狹けれども頗ぶる清潔に、元よりイヤナ紳士閥の香はすれど俗骨殆ど臭せんとする紳士の氣持悪さに僕は急に歸るのがイヤになり、今夜は此處で泊らうと言ひ出し、イヤ歸らうと意地張る巨眼を說き伏せて到頭宿帳に二人の名を書いて仕舞つた△夕飯を喰べながら女中君から種々と珍談を聽いた、昨夜三井物産會社員三百人斗り、塔之澤福住に泊つて大醉氣に騷いだと云ふ事、此の湯の宿の美しい女中は大概高等淫賣である事、女中で俸給の足らない時、初めて藝者に口がかゝる事、夫れが爲め藝者は常に穴を喰らしつゝある事、七湯中宮の下が一番風俗淫靡で、白人相手のプロスチチュートが澤山ある事△國體はだより凡山凡水では無い、乍併、其の秀麗なる山は紳士閥の淫樂を保護する黄金の番犬であつて、其の清麗なる水は、紳士閥の犧牲と爲れる多くの賣淫婦の化粧水である△亞剌比亞沙漠の聽する所野に青草なしと云ふ古語の通り、今や紳士閥の足跡の印する所、凡てのもの汚化せられざる無しと云ふ有樣である

(四日廿五日稿)

暮鐘

尾前溪泉

煙たゞよいのぼるとき
森の葉風に送られて
夕の空を西に見る
彩卵黄の雲間より
遙にひゞく暮の鐘

野のたゝかひに眞清水の
珠玉の汗を身にまとひ
一日の業を勵みたる
報酬は今か夕暮の
休息の床に歸れよと

自然の默示かゝやける
永劫の泉の湧く處
眞晝の征矢は强くとも
雄々しき腕に鍬を取り
田の面耕す樂しさよ

晩鴉、ねぐらに急ぐとき
靜に渡る鐘の音に
無限の歡喜胸に充ち
顏は夕陽にかゞやきて
鍬を肩にし歸るなり

平和けき胸にあふるゝは
優さしき妻の手すさびの
心こめたるうま酒を
笑波たゝへてその面に
あゝ貧乏も何かせん

閃く綺羅に身をつゝみ
玉冷樓に酒を呼び
遊びて喰ふ盗人が
など我等の夕暮の
無限の歡喜知るべきや

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

小說 漂浪者（三）

有秋生

雨の中を、女は、鐵三を援けて稍半丁も行つた。

稅關の揚場の端れに、木材や、空箱や、大鐘の壞れたのや、種々なものが堆積である。羅紗の大きな空箱なども、其處に一緒に轉んで居る、婦は其處に鐵三を下した。

「お前さん、此箱の中にお安み、雨に濡つこはないよ、さ。妾が入て進げやう」

婦は病者を援けて中へ入れた。然し彼女は依然雨に濡れて立つて居る。

「乃公、御陰で濡れずに眠られるが、貴婦一體何する心算だ」鐵三は憐な相にいつた、

「妾！、妾は何でも好いわね、別に病氣と云ふ譯ではなし！——」

「其だて、濡れては居れない——」

「濡れたつて好いよ、一夜位」

「いや、其では乃公が濟まん、此處で好ければ、一緒に此中へ這入つては——」

「お前さん、體が惡いのに、窮屈だらうぢやないか」

「いや、窮屈なことは無い、さ、這入りなさい」

雨に濡れた爲か、鐵三は、夜半過から、非常に發熱した、脣は火の樣に乾き、舌は板の樣に硬つて、苦痛も一通では無つた、婦は幾度か手拭を水に濕しては、男の火の樣な額を冷す、燃る樣な唇に、冷かな水道の水を含んで來ては、濕りを與へて遣つた。

其中に雨は、漸次に降細つて、箱の隙間を漏れては、絶間なしに鐵三の肩に、背に注きかゝる。婦は、其肌に着て居た一枚の袷袢を脫いで密と、鐵三の肩に掛て遣つた、然し鐵三は曉方まで苦悶の聲を絶さなかつたのである。曉方になつて、雨は漸く止んで、鐵三は、昏々と深き眠りに陷ちて了つた。

翌朝、朝日が、東の空の雲を破つて、海の上に靜な、神秘の色を浮べて登つて來る、白い雪の樣な海鳥の羽が、青い波に閃いて朝の平和の使の樣に飛び交ふ。

高いホテルの塔から、六時の鐘が、靜な波の上に響を落した。朝潮に包まれて、潮風で撫でた大蛇の樣に臥でゐつた波止場の影が、今や劃然と、巨人の腕の樣に海の上に延た。

婦は我に歸つたやうに四邊を眺めたが、稅關の役人の影も未だ見えぬらしい。

「お前さん、お起きよ、をい」

昏睡に陷つた鐵三は、軈て恍惚した眼を仰て、

「を、能く眠た」

「何うない、今朝は快い方なの」

「うむ、大分心地が好え」

「其は何よりだね、——では妾歸るからね、大事におしよ」

「うむ、有難い、此恩は忘れはせん」

「恩の何のつて、嫌だねえ、普通ぢやないかね、」

女の影を、鐵三は靜と見送つて居た、其の後姿の消え果てるまで。（了）

●立憲頌德碑建設の議に就て

晚秋生

我國憲法の發布せられてより此に十有九年、其間清に勝ちては臺灣を呑み、露に勝ちては樺太を併せ、餘勢を以て將に韓國を併呑せんとす。曲學阿世の徒の、國運の隆盛を嘔歌して已まざるものまた故なきにあらざるべき歟。

然と雖も、翻つて國内の實狀を觀察するに、貴族の奢華は其頂點に達し、富豪の私曲日々に甚だしきを致し、政商結托は公然の秘密となり、賄賂私曲俗を爲す而して民は數次の征戰に疲れて意氣銷沈、產を失ふて諸方に離散せんとするもの日々に益々多からんとし、失望青年の自殺を遂ぐるもの日夜相繼ぎ、大家高樓の下乘を失ふて飢渴に惱めるものゝ群をなすに至る。貴族の榮華富豪の專橫は餓鬼の目前の美食の如く國民の前には幻光を放ちつゝ、觀れ來る、而も彼等は之を味ふに由なくして不平怨嗟の聲國内に充滿す。最には憲政の美名に醉ひて、生を聖世に享けたるの幸を悅びたる國民、今や醒めて憲法の所謂る自由は失業倒產の自由饑凍死の自由なりしことを痛憤するに至れり。

嗟乎、立憲の精神疾く已に滅びて貪慾飽くことなき蛆蟲輩の、腐爛せる形骸に蟠集して私利を貪める、是れ我が政界の現狀にあらずや、此時に方つて立憲頌德碑建設の聲忽然として所謂上流社會の一角より聞へ初む、曰く建設費額八百萬圓曰く朝野の名士多く之に與る曰く寄附金募集の請願濟、曰く何曰く何と。

嗚呼「立憲頌德碑」の建設！覺醒せる國民の耳朶に響く此の聲や、正に多年國民の魅せられたる惡鬼の遺骸を送る吊詞の如く、哀々悽々の調を帶びて聞ゆなり、然れ共其の八百萬圓と云ひ知名の諸士と云ふ宛として古來の山師先生の口吻に相似たるものあるが故に、其の成否に就ては、吾人聊か疑ひなき能はざりき。果然、新紙は其の局に當るもの、不眞面目を傳へ、次で諸名士の之と關係を斷つもの、續出するを報ず、斯くて此の頌德碑建設の議は一時夢の如くに立消への畢るべき歟。

さもあらばあれ、今や國民は此の恨み多くして永遠に忘るゝ能はざる惡鬼の遺骸を葬送すべく、式と時と場所との撰擇中にあり。

嗚呼、爾惡鬼の壯麗なる葬送の怪、抑も何の日何の處に於て何の式を以てか、鎮まるべき。

。　。　。　。　。　。

たより

△木下尚江氏より　御無沙汰申譯無之候御境遇御推察申上候小生も是非何か書いて差上げねばならぬと常に心中には思つて居りますが近時誠に筆が動かず此頃は氣候が好くなると共に山野の人となり否の人となり旅行傳道に興味を多く持つて居りますので豫定の小說さへ今以て書き終へざる始末多罪幸に御海容願上候御詫まで匆々　五月十四日　伊香保町より

△赤羽一氏より　先達ては失禮仕候今夜出發の事となりました今朝何ひました處生憎御不在でした原稿は藤君に渡して置きました愈々女史の御英斷を祈る遠藤君によろしく　五月廿五日　京都市五條寺町通南入御影堂前

先日は世界婦人第一號より御送附なし下され誠に有がたく御座りました不遇の身の私しの心情を御察し下されてならむと轉た斷腸に咽ばれました私しは暗夜の提灯と再三再四繰返して親んで居り升私は微力及ばずながら本誌の購讀を人に勸めて居ります先は貴社の益々盛んなると諸兄姉の健全と祈りをます（小池作助）

△南助松氏より　敬愛する貴女よ　僕は未だ一面識なしと雖も、常に貴女の高風を欽慕する一人に候、聞く貴女は大坂事件當時の意氣もて今や戰後腐敗の俗眠を貪り居る我國婦人社界を警醒し而して婦人が社會より享くべき自由と人權を伸張せんが爲めに熱心御盡瘁の由敬服に候殊に尊ぶべき貴き働きと存じ候。過般僕も足尾騷ぎに付き不慮の災に罹り獄中の人となりたる時より此方作京の刑罰の如きは尋常ならぬ慰藉、故副を崇り多大の御同情なき婦人千萬感謝の至りに不堪候早速御禮狀差出可申之處何樣不自由の身、遂に延引に打過ぎ候段其罪不悪恕を乞ふ右不取敢ハガキを以て御禮申上候如此御座候早々余は不日拜姿の時萬謝可申述候　五月廿八日

●谷中村民救助金募集

△栃木縣谷中村は廣さが一千二百餘町歩もある鑛毒地のうちで比較的被害の少ない、毎年の收穫貳拾萬圓にもなる、關東一の良い土地であり升

△谷中村の周圍は二百年も經つ三里半に渉る丈夫な大堤防であり升。

△明治三十五年の洪水で堤防の北部數百間は斷されました。

△處が不思議にも不都合にも栃木縣廳は壞われた堤防の修築をしない復舊の工事をして吳れない。

△唯だそればかりでなく次の次の年まで掛つて土木掛りが大勢でコツ〳〵と堤防の丈夫な處まで崩して壞はして居た相であり升。

△堤防を壞はした金が拾萬圓でありましたしかも其等の堤防を修繕した費料として表面に出來て居るので。

△ついに「谷中村は洪水で駄目だから潰して了はふ」と云ふ一大陰謀の買收事件が生まれて來たのだ相です。

△村民は六年間一粒の米も取りませんけれども何か作らなければ食ふて生きて居られないから水の引ゐて居る間見作を取ろふとして去年も麥を種りました。

△麥を種るにも雪解け水を防ぐ爲めに小さな土手を作らなければなりません。

△その土手を作つて麥を種ろふと今年も寄附金を集めて村中總出で土を盛り石を積んで居ると水が出てつい流されました何しろ大きな堤防が壞わされたが儘であるのですから。

△村民はもう食ふものがありません穗のある麥畑は水の底になつて了いました。

△谷中村民は餓死をするより外に仕方がありません。

△何卒皆樣よ御助け下さい、我が社は御取次致して居り升。

府下角筈七百三十八番地

世界婦人社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新小說

第拾貳年 第六巻

●小說●

沈默……議員素人 藤代
惡血……三島霜川
幸右衛門……中島孤島
吉田寅次郎……高安月郊

玄妙の宇宙……土井晩翠
フイットマンの情史……小山內
純情の聲……
同稱錄……後藤宙外

金文字……柳川春葉
拾草鞋……山岸荷葉
戀の虎橋……西山萬濱
オペラのファスト……永井荷風
嵐よ騷げ……兒玉花外
書家談叢……黒田湖泉
役者備忘錄……

東京座と新富座……杉贋阿彌
遺傳性疾患……下平文柳
結核患者と消毒法……石原醫學士
臺所の改良……

誘拐業……龜井まき子
萬年町の貧民……樋口二葉
富岡製絲場參觀記……白柳秀湖
夏衣……由花
……流行子
裝幀 川村清雄 渡部審也 山中古洞 河合英忠

一冊賣價廿五錢○郵稅二錢五厘○六冊前金壹圓五拾九錢○郵稅共 手代用一割增 ○切

東京市日本橋 春陽堂

家庭編物全書

女子高等師範學校教授 森本義子著 家庭編物全書 和裝全一冊 正價金八十錢 郵稅金八錢

太田梅子著 女子技藝 果菜製作法 和裝全一冊 正價金四十五錢 郵稅金六錢

英國醫學博士チエバーセ著 三樹女史譯 新婦の心得(再版) 洋裝全一冊 正價金五十錢 郵稅金六錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉 赤堀菊子共著 即席惣菜料理(五版) 洋裝全一冊 正價金三十五錢 郵稅金四錢

落合直文著 小野鷲堂書 女子消息 雁のゆきかひ(新刻) 和裝全二冊 正價金八十錢 郵稅金六錢

關根正直編 文範 筆のあや(再版) 和裝全一冊 正價金四十五錢 郵稅金六錢

東奭五郎著 新案 家計簿記 洋裝全一冊 正價金七十錢 郵稅金八錢

宇野彌太郎 渡邊鎌吉 共著 家庭西洋料理 洋裝全一冊 正價金九十五錢 郵稅金八錢

圖書總目錄郵券二錢送附あれば呈す

◎發行所 日本橋區通一 大倉書店 賣捌各書店

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價 大瓶廿五錢 瓶入十二錢 袋入五錢 小袋三錢

本舖 ライオン歯磨發賣元 東京神田柳原川岸 小林富次郎

新版廣告

青山學院々長 本多庸一先生 說教集 紙質精撰寫眞入 定價金六拾錢 郵稅金八錢

是レ先生獨特ノ通俗的思想ヲ以テ深遠ノ眞理ヲ極メテ平易懇切ニ說話セシモノ今日マデアリフレタル翻譯的口吻ナク先生ガ特創ノ思想ヲ以テ日本ノ人情ニ投合シ一言一句餘韻嫋々トシテ讀者ヲシテ興感措カザラシム請フ一本ヲ座右ニ置カレンコトヲ

バウン博士著 小山正武氏譯 基督教天啓論 一名 聖書研究の要領 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢

今ヤ世界生存競爭ノ洪潮大浪ハ益ス激盪シテ地球ヲ震撼シツヽアルニ非ズヤ。此大試煉ニ遭フテ屈セズ撓マズ奮闘猛進向上シ以テ善ク其靈的覺醒ヲ完フシ以テ善ク其ノ心靈ノ平和ヲ永續シ得ベキノ途ハ他ニ非ズ。唯敬虔ヲ以テ聖書ヲ活讀シ之ヲ實行スルニ在ルノミ。「バウン博士此著ハ極メテ簡明ニ聖書研究ノ第一義ヲ示セル者。實ニ今日初心信徒ノ爲メニ不可缺的指鍼タリ」

瀧浦文彌君譯 活ける基督信徒 ウヰン、アールモツトー述 定價金參拾錢 郵稅金四錢

モツト先生ノ名論卓說ハ世既ニ之ヲ知ル本書ハ眞實ナル信者、否ノ用、驅殖ノ殖滅、新鋭ノ力、傳道精神ノ振興、個人傳道ニツキテ、模範傳道者ナル基督等ノ點ニ就キテ懇切周到ニ論ジテ餘蘊ナシ而シテ瀧浦文彌君經快流暢ノ筆ヲ以テ之ヲ譯セラル實ニ信徒タルモノハ必ズ一讀スベキ良書ナリ

東京市銀座四丁目壹番地 內外書肆 教文館

大阪 平民新聞

△毎月二回、一日、十五日發行▽

東京に於ける日刊平民新聞禁止の厄に遇ひしより日本の社會主義者は機關缺乏の不便を忍びつゝあり、本紙は即ち此缺を補はんが爲に發行するものにして從前日刊紙に關係ありし諸氏及他の數人の同志執筆す

初號六月一日發行要目

△發刊の辭△不穩とは何ぞや△何人の法律△同盟罷工と警察、其他數項……時事評論
△世界社會運動の大勢……堺利彦
△貨銀制度(クロポトキン)……山川均譯
△鹿の兄(お伽噺)……深尾韶
△大鹽平八郎(新講談)……船越生
△貨銀の話(通俗講話)……森近運平
△同志消息△文苑概觀△其他材料……畑豐富

定價 一部金五錢、半年分金五十五錢 一年分金壹圓五錢、郵送無料

◎大阪北區上福島北三丁目一八五 大阪平民社

成瀬正弘君編著 西洋古今名訓逸話集 定價四十錢 郵六錢

本書は西洋古今の名訓逸話を集錄せる者にて趣味と教訓とを兼備へ廣く家庭の讀料に供せん事を期す世道に宗教の書多しと雖も讀むこと二三頁にして忽ち倦厭を來し萬信の人病床の人若くば獄裡の人に非ざれば忍耐して通讀せざるが如きもの亦尠からず本書は茲に鑑むる所ありて讀者をして興味を感ぜしめつゝ讀み終らしめんことを期し其材料の撰擇に充分の注意を加へたり是本書の特色なり

發兌 東京市京橋區尾張町二丁目 警醒社書店

新築落成移轉

小兒病 內科 外科 診療

府下淀橋町角筈(水道前) 淀橋醫院 竹下繁太郎

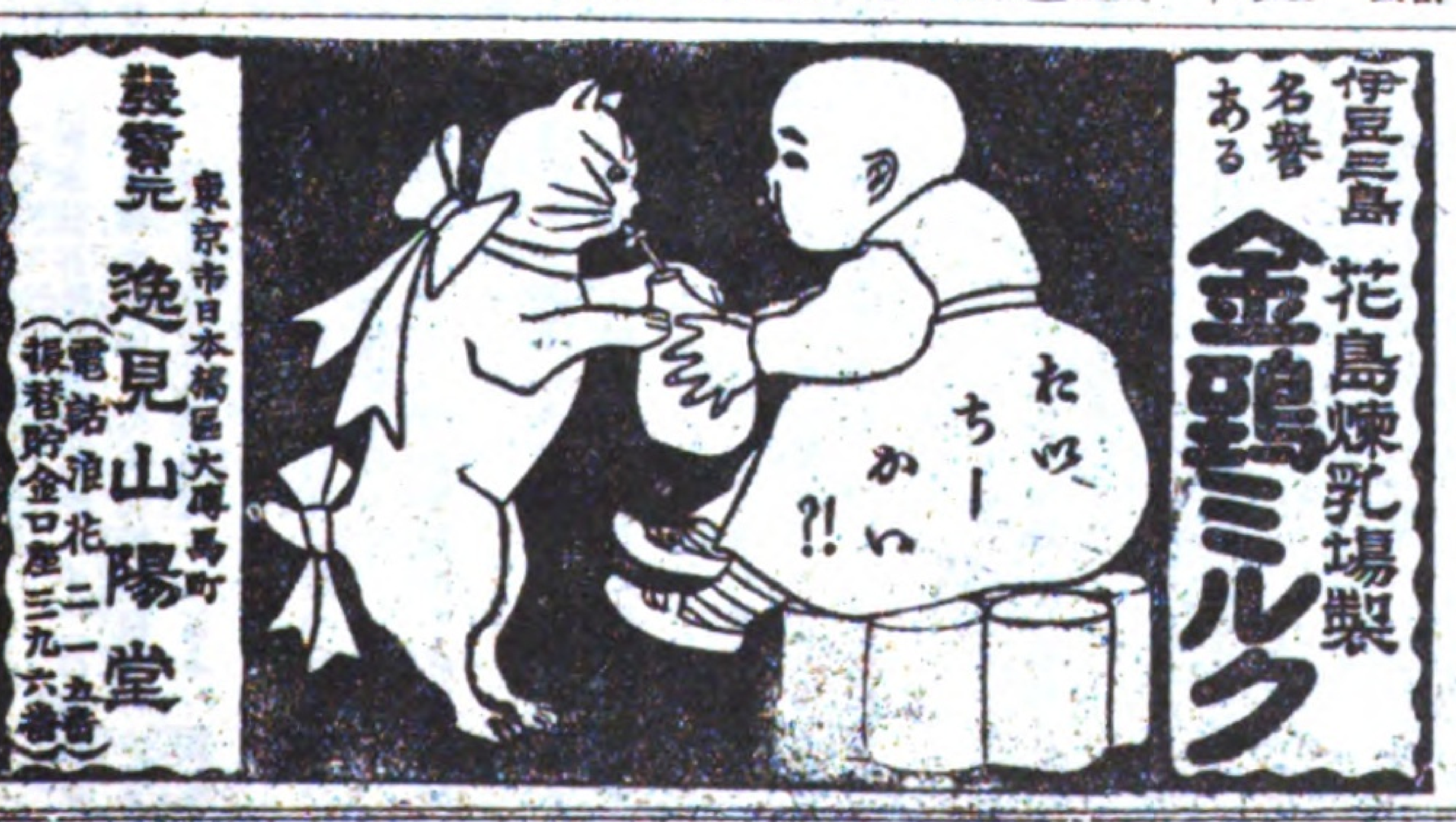
各國語聖書、基督教書類 其他一切新刊書類確實販賣

東京神田區猿樂町二十五番地 振替貯金口座六三三〇番 中庸堂書店

●歯科治療● 自午前八時 至午後六時

神田區須田町廿六番地 歯科醫 吉瀨才一郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意 勤勉料業者の便利上夜間十時迄治療仕候



◎定價

△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢

△申込は總て前金の事、△郵稅當方持

發行兼編輯人 石川三四郎 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地

印刷人 神崎順一 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七六二番地

發行所 世界婦人社 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地

印刷所 [illegible] 東京市京橋區[illegible]二丁目廿一番地

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY